「１７年目の秘密」

第１０話「生みの母と育ての母」

第一稿

作・壽倉　雅

登場人物

谷島春樹（17）　〇〇高校全日制二年生
夏希（20）　姉、デザイン事務所事務員

竹中倫子（17）　アルバイト

山岸利枝子（17）　〇〇高校全日制二年生
友子（45）　母、スナックのママ
あやめ（15）　妹、中学三年生

宮田真由子（17）　未婚の母

藤原亮（享年17）　〇〇高校全日制二年生
回想出演
宣彦（48）　亮の父、会計事務所所長
佐和（46）　亮の母、会計事務所副所長
深雪（15）　亮の妹、中学三年生

川村浩輔（17）　〇〇高校定時制二年生

牧和哉（17）　××高校二年生

永井聡実（17）　××高校二年生
滋郎（50）　父、会社員
冨美代（50）　継母、専業主婦

渡辺悦子（45）　実母、出版社編集長

同級生　亜沙美（17）　〇〇高校全日制二年生
〃　剛士（17）　〇〇高校全日制二年生

〃　奈々（17）　〇〇高校全日制二年生

同級生　紗耶香（17）　××高校二年生

〃　香澄（17）　××高校二年生

〃　美央（17）　××高校二年生

寺沢　隆三（47）　喫茶店店長

戸倉　早苗（43）　あやめの実母

1　公園

聡実と和哉が話している。

聡実「和哉君、本気でそんなことを……」

和哉「確かに、一度別れて、変な気遣いがなくなって、楽になったって思ってた。でも、今日の春樹たちの姿見て、本当に支えてあげたい人は、ちゃんと支えて、守ってあげたいって思ったんだ」

聡実「でも、和哉君はアメリカに行くんだよ。あの時別れたことが、ちょうど良かったんだよ。またヨリ戻したところで、すぐにまた別れるんだから」

和哉「例えアメリカに行っても、電話もメールも出来るんだから、繋がってはいられるだろ。そりゃ、存在は遠くなるかもしれないけど、お互いを想う気持ちさえあれば、繋がっていられると思うんだよ」

聡実「そんな簡単に行くかな……」

和哉「それに、もし会いたくなったら、いつでも会えるんだよ。旅費とパスポートさえ

あれば」

聡実「……」

和哉「アメリカに行って、遠い存在になるなんて思ってるけど、こうして見ると、そんな遠くはないかもしれないぞ」

聡実「そうだけど……。でも、結局アメリカに行っちゃうと、そうすぐには戻ってこられないでしょ。私たち八人だって、中学卒業してから、結局はそんなに会えなくなって……。一緒にご飯食べに行った機会も少なかったし、最後に八人が全員揃ったのって、真由子の出産祝いだったでしょ。まさか、亮君が早く亡くなるなんて思わなかったから、その次に八人が揃うのが亮君のお葬式だなんて思わなかったし……」

和哉「八人っていう人数もあるかもしれないぞ。俺たちは二人なんだよ。二人の都合さえ合えば、いつだって会えるんだから」

難しい顔の聡実である。

2　藤原家・居間

宣彦が新聞を読んでおり、佐和が昼食の支度をしている。

宣彦「深雪、まだ起きないのか。もう昼だぞ」

佐和「もうしばらく休ませてあげよう。亮の初七日が済んで、年が明けたぐらいから、急にひどいぐらいに落ち込むようになって……。学校だって休んでるのよ。少しはゆっくりさせてあげないといけないのかもしれない。お通夜やお葬式のときは普通だったけど、やっぱり亮を失ったのが大きいのよ……」

宣彦「俺たちも、しばらく休もう。亮のことを思い出すのは、俺たちだって辛いかもしれないが、亮の荷物整理するのも良いだろ」

佐和「それもそうね。でも、部屋はそのままにしときたいの。片付けると、亮が怒りそうな気がして」

宣彦「そうだな（と笑う）」

3　同・深雪の部屋

ベッドで眠っている深雪――魂が抜けたように、呆然とした顔をしている。

4　藤原会計事務所・表

春樹が冷静な顔をしてやってくる。

5　スナック〝友子〟・表

利枝子が、飾られている門松を片づける。

6　同・店内

友子と利枝子が、仕込みをしている。

と、ドアが開くと、和装をした女性客が入ってくる。

女性客「ごめんください」

友子「すいません。営業時間は、五時からなんですけど……」

と、その女性客・戸倉早苗（43）を見て、驚愕する。

友子「早苗……」
利枝子「母さん、この人は……？」
友子「あやめの母親よ」
利枝子「えッ……」
と、唖然とした顔で早苗を見る。

タイトル
『第１０話　生みの母と育ての母』

7　スナック〝友子〟・店内
早苗と友子が、テーブルをはさんで話している――お茶を出す利枝子。
早苗「ありがとう。利枝子ちゃんでしょ。大きくなったね」
利枝子「……」
早苗「私のことなんて覚えてないよね。昔ここで働いてた従業員だなんて」
利枝子「……」
友子「それで、あんた、今頃私に何の用があって来たのよ。一体、どの面下げて私に会

いに来たの」

早苗「あやめを、引き取りに来たの」

友子「早苗……」

早苗「私、やっと独り立ちして、今度自分のお店を銀座で持てるようになったの。あやめを養える余裕もできたから、また親子二人で暮らそうと思って……」

友子「バカ言わないでちょうだいッ……。あんたは、私の旦那と駆け落ちして、交通事故で旦那が亡くなった後に、女手一つじゃ育てられないからって、いつの間にか産んでたあやめを私に押し付けたじゃないの」

早苗「……」

友子「そりゃ、戸籍上は、あんたはあやめの母親かもしれない。あやめは、旦那とあんたの間に出来た憎い子どもだったけど、子どもに罪はないと思ったから、私は本当の母親のように、利枝子と同じようにあやめを育ててきたの。嫌な思いをさせたことだってあったかもしれないけど、あやめは、

利枝子と同じぐらい、私にとっては大切な娘なの。そのあやめを、あんたに渡すわけにはいかないわッ」

早苗「友子ママ……」

利枝子「(かぶせて)そうですよ。あやめは、自分がここの本当の娘ではないことを知ってても、私たちを本当の家族だと思って暮らしてるんです。今頃、本当の母親が来たところで、一緒に暮らしたいだなんて、言うわけないじゃありませんか」

早苗「今日、あやめは……？」

友子「部活に行ったわ」

早苗「そうですか……。あやめに、会いたかったんですけどね……」

友子「あやめには、会わせないわ。あやめが帰ってくる前に、とっとと帰ってちょうだい」

早苗「友子ママ……」

友子「あんたの顔なんて見たくないわッ……。早く帰ってよッ……」

利枝子も、早苗に冷たい視線を送る。

早苗「分かりました。今日はこれで、失礼します。また、後日改めて来ます。それまでに、あやめを説得しといてください」

と、一礼すると、去っていく。

利枝子「母さん……」

友子「利枝子、塩撒いてッ……」

険しい顔をしている利枝子。

8　藤原家・居間

春樹が来ており、宣彦と佐和と話している。

春樹「亮君の葬儀の時は、出席をせず、申し訳ありませんでした」

佐和「いえ……。事情は、お友達から聞いておりました。そこまで落ち込むということは、それぐらい、亮のことを思っていてくれたからですものね……」

春樹「今となっては、最後に亮君とお別れ出来なかったこと、後悔してるんです。みん

なには、随分と心配かけたと思ってます。
でも、何とか支えがあって、立ち直りました。明日の新学期からは、また学校にも行くつもりです。年末の数週間とはいえ、遅れた分を取り戻さなければいけませんし」
宣彦「元気になったみたいで良かったです。うちは、まだ深雪が……」
春樹「深雪ちゃん、何かあったんですか？」
佐和「実は、初七日が済んだあとぐらいから、急に様子が……。学校にも行きたくない、ご飯もいらないって、この年末からずっと部屋から出てこなくなってしまったんです……」
春樹「えッ……」
佐和「一応、ご飯は部屋の前まで持って行ってるんですけど、ほとんど食べてなくて……。ごくまれに、少し箸をつけてるぐらいです」
春樹「反応はあるんですか？」
宣彦「トイレや風呂は、深夜にこっそり行っ

てるみたいですし、今日も物音はしてるので……」

春樹「一度、お話をさせてはくれませんか？」

宣彦「どうでしょうね……。私たちが行っても、顔を見せてくれないので……」

春樹「そうですか……。でも、一応やってみたいと思いますが、よろしいですか？」

佐和「はい、どうぞ」

と、立ち上がると、春樹を案内していく。

9　同・廊下

佐和、春樹、宣彦がやってくる――深雪の部屋のドアをノックする佐和。

佐和「深雪。春樹君が来てくれたわよ」

部屋からの反応がない。

春樹、ドアをノックすると、

春樹「深雪ちゃん。いるんでしょ。ちょっと、話がしたんだけど。良い？」

お互い、諦めたような顔で見合う宣彦

と佐和。

春樹「ねえ、深雪ちゃん。俺も、亮君が亡くなってすぐの間は、今の深雪ちゃんみたいになってた。でもね、心配してくれる人がいて、当たり前のような生活をしてるだけで、生きてることが、どれほど有難いか実感したの。それに、いつまでも落ち込んでると、亮君が喜ばないと思ったの。だから、こうして立ち直ることができたの。一回、俺に顔見せてよ」

しかし、まだ反応がない――春樹も、諦めたような顔になる。

春樹「（宣彦たちに）やっぱり、無駄かもしれませんね」

と、宣彦と佐和と共に去っていこうとする――ドアが開き、深雪が顔を出す。

佐和「深雪……」

深雪「……」

春樹「ちょっと、話そうか」

10　同・深雪の部屋

春樹と深雪が話している。

春樹「いつまで、こんな暮らし続けるの？」

深雪「……」

春樹「俺が言えた立場じゃないけど、学校も行かなきゃ」

深雪「春樹先輩は行ってないんですか？」

春樹「明日の新学期初日が、復帰一日目だよ。遅れた分を取り戻さなきゃいけないし、それに、決めたから。亮君の分まで、高校生活を楽しまなきゃって」

深雪「……」

春樹「自分の余命を知らなかった亮君は、いつか退院して、また高校生活を楽しみたいって思ってはず。でも、それができなくなった以上は、後に残された俺たちで、亮君の分まで生きて、高校生活を楽しまなきゃいけないって思ったの。それが、今の俺たちに出来ることだって思ったから」

深雪「私だって、お兄ちゃんの分まで生きな

きゃって思いましたよ。でも、お兄ちゃんが亡くなったことで、私、生きる気力が無くなったんです。何のために、私は生きてるんだろうって、それが分からなくなったんです」

春樹「……」

深雪「……」

春樹「あ、そういえば、そろそろ推薦入試だね」

深雪「え……」

春樹「もう、あれから二年か……。高校なんて、入ったところでどうなるんだって思ってたけど、高校生活も青春を楽しめる場所だから、とりあえず近いところを受けろって、亮君が勧めてくれたの」

深雪「お兄ちゃんが……」

春樹「うん。もうすぐ二年生が終わるけど、本当に高校生活はいろんなことがあるなって思った。大変なことや辛いこともあったけど、やっぱり日常生活は楽しかった。

亮君が、受験を勧めてくれなかったら、今頃、俺は高校生活を楽しめなかったって思ってるの。だから、亮君にはすごく感謝してるの。高校だけじゃない、小学校からずっと、俺が笑顔でいられたのは、亮君がいてくれたからなの」

深雪「……」

春樹「深雪ちゃんには、そんな亮君みたいな子になってほしい。周りのみんなを笑顔にしてくれるような子に」

深雪「（涙を浮かべながら）春樹先輩……」

春樹「深雪ちゃんは幸せ者だよ。あんな元気で、うるさいお兄ちゃんを持って……。深雪ちゃんは、そんな素晴らしいお兄ちゃんに、今も支えてもらってるんだってこと、忘れないで。亮君は、きっと深雪ちゃんのことを見守ってくれてるから……。そのためにも、深雪ちゃんには元気になってもらいたいの」

深雪、号泣しながら、春樹に抱きつく。

深雪「春樹先輩……」

春樹も、目から涙がこぼれ落ちる。

春樹「亮君は死んじゃったかもしれない。でも、どこかできっと、俺たちのことを見守ってくれてるんだよ。だから俺も立ち直れたのかもしれない。亮君っていう存在は、無くなってないんだよ」

鼻をすすっている深雪――安堵の笑みを浮かべて、深雪の背中をさする春樹。

11　同・廊下

宣彦と佐和が立っている――涙を流す佐和。

その佐和の肩に、優しく手を置く宣彦。

佐和「あなた……」

宣彦「これから、亮に支えられながら、俺たちも生きていかなきゃな……」

佐和「そうね……」

優しく頷く宣彦。

12　中央高校・全景（翌朝）

13　同・二年Ａ組教室

利枝子が難しい顔をしている――亜沙美が登校してくる。

亜沙美「おはよう。（と利枝子を見ると）あけおめ！」

利枝子「……」

亜沙美「どうしたの、利枝子？　具合でも悪いの？」

利枝子「ううん。大丈夫だよ」

と、剛士と奈々が登校してくる。

剛士と奈々「あけおめ」

亜沙美「あけおめ」

利枝子「……」

奈々「利枝子？」

利枝子「ん？　どうした？」

奈々「何かあったの？　冬休みの間に」

利枝子「別に。いつも通りだよ」

と、春樹が登校してくる。

春樹「みんな、あけましておめでとうッ」
一同、驚いたような顔で春樹を見る。
利枝子「春樹ッ……」
亜沙美・剛士・奈々「春樹ッ……」
春樹「みんな、年末年始はご心配をおかけしました。でも、もう大丈夫。この通り、完全復帰しましたから」
利枝子「良かった。復帰するなら、連絡ぐらいしても良いでしょ」
春樹「みんなを驚かせようと思ってさ（と笑う）」
剛士「何が驚かせるだよ。散々心配させといて」
春樹「それは、ごめんなさい。と言ってる早々、こんな頼み事するのは何だけど、俺が休んでる間のノート、見せてください」
亜沙美「そんなことかと思って、ノートのコピーは用意してるよ」
春樹「亜沙美……」
亜沙美「春樹の性格は、分かってるから。や

っぱり春樹は、真面目で面白くて優しい春樹じゃないとね」

春樹「ありがとう、亜沙美」

ニコニコと笑う亜沙美。

利枝子、また難しい顔になる――その利枝子に気が付く春樹。

14　道

自転車を引いている春樹と、利枝子が歩いている。

利枝子「春樹と一緒に帰るのも久しぶりだよね」

春樹「そうだね。ちょっと前までは、よく亮君も一緒に帰ったよね。学校帰りに、俺の家で勉強したり、一緒にご飯食べたりさ」

利枝子「そんなこともあったね」

春樹「俺たち、まだまだ亮君と一緒にやりたいこと、たくさんあったのにね……」

利枝子「春樹……」

春樹「（苦笑して）分かってるよ。もう、こ

んなこと言ったって、無駄だってことぐらい」

利枝子「……」

春樹「俺たち、すごく大きくて大切なものを失っちゃったんだよね。家族同然だった、大切な存在を」

利枝子「家族同然か……」

春樹「ねえ、利枝子。冬休みの間に、何かあった？　今日一日利枝子見てて、何か元気がないように見えてさ。俺の復帰一日目だったのに、あんまり気持ち的に明るくなってないように見えたからさ」

利枝子「やっぱり、顔に出てたか……」

春樹「利枝子、分かりやすいもん。すぐに顔に出るから」

利枝子「春樹には、何にも隠せないね（と苦笑する）」

15　スナック〝友子〟・表

春樹と利枝子がやって来る。

と、店のドアが勢いよく開き、早苗が
友子に突き飛ばされるように出て来る。
春樹と利枝子、いぶかしそうに見る。
友子「もう二度と来るなって言ったでしょ。
あやめは、絶対にあんたに渡さないからね。
それが分かったら、とっとと出てってよ」
と、ドアを閉める。
早苗、利枝子たちに気づくも、知らん
顔をして去っていく。
春樹「あの人は？」
利枝子「あやめの、本当の母親よ」
春樹「えッ……」
利枝子「一度は、あやめを捨てたのに、独立
して店を出して、あやめを養える余裕が出
来たからって、引き取りに来たんだよ」
春樹「そんな自分勝手な……」
利枝子「やっぱり、春樹もそう思うでしょ。
自分の都合で、あやめを引き取ろうなんて、
そうはさせないんだから……」
春樹「よく、家族で話し合ってみるんだね。

あやめちゃんのことは、さすがに俺は口出せる立場じゃないからね。これは、山岸家の問題なんだから」

利枝子「うん……。あやめ本人にも、一度聞いてみる」

と、難しい顔になる。

16　山岸家・居間（夜）

夕飯を食べている利枝子、友子、あやめ。

利枝子、箸を置くと、あやめに、

利枝子「ねえ、あやめ。本当のお母さんと、暮らしたいって思う？」

友子「利枝子ッ……（と止める）」

利枝子「（あやめに）ここ数日、あやめのお母さんが、お店に来てるの。けど、母さんはあやめを渡したくないからって、すぐに追い出してるけど、あやめ自身はどう思ってるの？」

あやめ「……」

友子「あやめ。正直に言って」
あやめ「お母さんって言っても、顔も知らないし、どんな人かも分からないから、どうと言われても……」
利枝子「けど、本当のお母さんは、あやめを引き取りたいって言ってるんだよ。それについては、どう思ってるの」
あやめ「私にも、分からないよ……」
黙ってしまう利枝子と友子。

17　同・あやめの部屋
あやめが、元気なさげに入ってくると、ベッドに突っ伏す。

18　同・居間
後片付けをしている利枝子と友子。
友子「あんなこと言って……。あやめが悩むだけじゃない」
利枝子「ここに残るか、本当の母親に引き取ってもらうか、それを決めるのは、あやめ

自身だから」
友子「冗談じゃないわよ。あの子は、まだ十五よ。こんな大事なこと、一人で決めれるわけないでしょ。一生の問題なんだから」
利枝子「十五だって、もう自分の判断ぐらいできるよ。今回のことは、あやめの判断に任せよう」
友子「じゃああんたは、もしあやめが本当の母親のところに行きたいって言ったら、それでも良いって思ってるの？」
利枝子「あやめが決めることなんだから、しょうがないでしょ」
友子「冷たいんだからねぇ……。あんたには、分からないでしょ。私がどんな思いであやめを育ててきたか……。だから、そういうことが言えるのよ」
利枝子「……」
友子「私はね、あやめも、利枝子と同じように、本当の娘だと思って、可愛がって今日まで育ててきたの。その娘を、誰がそう簡

単に手放すもんですか……。あの子の母親は、この私なんだから」

利枝子「母さん……」

19　同・あやめの部屋

あやめがベッドで眠っている。

と、こっそりとドアを開けて、利枝子が様子を伺っている。

あやめ「お姉ちゃん……？」

利枝子「あ、起きてた？」

と、入ってくる。

あやめ「寝ようと思っても、寝れなくて……」

利枝子「そっか……」

あやめ「ねえ、お姉ちゃん。私、本当のお母さんのところ、行こうと思ってるの」

利枝子「あやめ……」

あやめ「私が本当のお母さんのところに行けば、お姉ちゃんはお母さんと本当の母娘二人っきりになれるんだよ。邪魔者は、去ってくよ」

利枝子「確かに、母親の違う娘だから、あやめをずっと毛嫌いしてたこともあったけど、今はもう違う。あやめのことを、邪魔だなんて思ってないから」

あやめ「お姉ちゃんがそうやって言ってくれるのは嬉しいよ。でも、やっぱり本当の母親の元に行くのが、私にとって本当の幸せだって思うから」

利枝子、あやめを強く抱きしめる。

あやめ「お姉ちゃん……」

利枝子「本当は、あやめを手放したくなんてない……。母さんも、絶対に本当の母親には渡さないって言ってた。でも、あやめがそこまで言うんだったら、あやめの意思を貫けば良いと思う」

あやめ「……」

利枝子「ただ、これだけは忘れないで。私たちは、離れ離れになっても、姉妹だからね」

あやえ「うん……」

寂しい顔の利枝子である。

20　中央高校・全景（数日後）

21　同・新聞部室

春樹と利枝子が、弁当を食べている。

春樹「じゃあ、あやめちゃん、本気で……？」

利枝子「一応、その方向性で行くことが決まった」

春樹「そっか……。もうすぐで春になるけど、やっぱり春は別れの季節なんだね……」

利枝子「そうだね……」

春樹「せっかく、仲の良い姉妹になれたのに、別れるようなことになっちゃうなんてね……」

利枝子「それは私も思った。でも、良いの。姉妹の絆は、そう簡単には無くならないから」

春樹「利枝子、変わったね。この一年で」

利枝子「え……？」

春樹「お店の手伝いで、散々母親の愚痴言っ

て、血の繋がっていないあやめちゃんに暴言吐いたことだってあったのにね」

利枝子「いろんな障害があるから、今の幸せがあるんだよ。あやめだって、その障害を乗り越えた結果、自分で自分の道を決めたんだよ。自分の人生だからね」

春樹「自分で決めた、自分の道と人生か……」

× × ×

〈フラッシュ〉

牧家・和哉の部屋での浩輔。

浩輔「自分で決めた道だから、後悔してないけどな。周りに何言われようが、俺は俺なりに自分の人生生きてくから」

× × ×

春樹「俺たち、いろんなことがあったけど、みんな自分自身を大事にして、自分自身を磨き上げてきたんだよね。だから、辛いことも嫌なことも、みんなで乗り越えられて、何とかやって来られんだよね」

利枝子「そうかもね。みんながいたから、や

って来られたんだよね」

春樹「ねえ、利枝子」

利枝子「何？」

春樹「俺たちこれからも、支えあっていける友達でいようね」

利枝子「うん……」

22　スナック〝友子〟・店内

友子が仕込みをしている――やる気が起きないらしく、カウンター席に腰掛ける。

23　同場所（回想・十五年前）

早苗が、当時赤ん坊のあやめを乗せたベビーバスケットを、友子に渡す。

早苗「友子ママ、お願いします。あの人が交通事故で亡くなって、私は、女手一つでとてもあやめを養える余裕がないんです。養護施設に入れようとも思ったんですけど、そんな可哀想なことはできなくて……。友

子ママだけが頼りなんです」
友子「冗談じゃないわよ。あんた、うちの主人奪っておいて、今度は、この赤ん坊を私に育てさせろって言うの？」
早苗「あの人の、形見だと思って……」
友子「何が形見よ。あんたたちの愛の証を、どうして私が育てなきゃいけないのよ」
早苗「友子ママが怒るのも無理ないと思ってます。けど、もう誰も頼れる人がいないんです。養育費も何もあげれないし、自分勝手だって言うのは分かってます。けど、それでもお願いします」
と、逃げ去るように走り去っていく。
友子「早苗ッ……」
と、号泣するあやめ。
友子、立ち止まり、振り返るとあやめを抱きかかえ、
友子「ごめんね。大きな声出して。よしよし、良い子だねぇ」
と、あやし始める。

24　同場所（回想戻り）

友子の目から涙がこぼれ落ちる――悔し泣きをして、おしぼりを強く握り締める。

25　中央高校・駐輪場（夕方）

春樹が、自転車の前かごに荷物を乗せて、帰ろうとしている。

と、春樹の携帯電話が鳴る。

春樹「もしもし、和哉？　どうしたの。え、聡実。いや、何にも連絡ないけど。うん……え、行方不明ッ……？　分かった。みんなにも連絡して、探してもらうようにする。うん、じゃあね」

と、電話を切る――不安な顔の春樹である。

26　道

利枝子が、周囲を見ながら、聡実を探

している。

27　歩道橋の上

和哉、上から街全体の景色を見て、聡実を探している。

28　公園

真由子がやって来ると、周囲を見て怒鳴る。

真由子「聡実ッ……」

29　繁華街

春樹と倫子がやって来る。

春樹「まさか、こんなところには……」

倫子「いないよね……」

30　街

春樹、倫子、利枝子、真由子、和哉が合流する。

利枝子「いた？」

真由子「こっちにはいなかった」
春樹「俺たちも繁華街のほうに寄ってはみたんだけど」
倫子「聡実に限って、いるはずないと思ったから……」
和哉「わりい、みんなに心配かけて……」
春樹「困ったときはお互い様だよ。俺たち、ずっと助け合ってきたんだから」
真由子「そうだよ。今日は、ちょうどお父さんがいて、真実の面倒見てくれてるから、身軽に動ける体なの。何でも言って」
和哉「ありがとう……」
春樹「聡実の家族には、電話した？」
和哉「聡実の家の番号知らないから、本当のお母さんには、連絡しといた。海外の仕事が多いんだけど、ちょうど今は日本にいるみたいで良かった……」
春樹「そっか……。もうすぐで九時だから、娘がまだ帰ってきてないと、心配するんじゃないかな（と不安な顔をする）」

31　滝雀学園高校・体育館倉庫

柱に縄で縛られた聡実が、眠っている――目を開けると、自分の体が身動きできないことに気が付き、必死でもがくが、縄は外れない。

諦めたように、溜息をつく聡実。

と、数人の足音が聞こえてくる――音は、だんだんと大きくなってくる。

恐怖におびえている聡実。

32　中央高校・定時制二年教室

授業が終わり、生徒たちが下校していく。

浩輔、携帯電話を取り出し、電話をかける。

浩輔「もしもし、春樹。今、授業終わった。聡実、見つかったか？　そっか……分かった、俺も今から方々回ってみる。じゃあな」

と、電話を切ると、小走りで出ていく。

33　街

春樹「浩輔、今、授業終わったって」

和哉「よし、じゃあみんな、もう一度、手分けして回ってみよう」

一同頷くと、散らばるように去っていく。

34　永井家・玄関

悦子が、小走りでやって来ると、慌ててインターホンを押す。

と、滋郎の声がする。

滋郎の声「悦子か？　どうしたんだ、急にお前が来るなんて」

悦子「話はあと。良いから、すぐに開けて。急いでッ、早くッ……」

と、ドアが開き、滋郎が出てくる。

悦子「（勢いよく入り）お邪魔するわよ」

と、居間に向かう――呆気にとられている滋郎。

35　同・居間

ソファー越しに、滋郎と悦子が向かい合っている――お茶を差し出す冨美代。

悦子「呑気にお茶なんて飲んでる場合じゃないわッ……」

冨美代「……」

滋郎「聡実がいなくなったって、大げさに考えすぎだろ」

悦子「もう九時過ぎてるのよ。それなのに、聡実が帰ってきてないなんて、あんたたち、不審に思わなかったの？」

冨美代「普段、少し帰りが遅くなっても、友達と会ってるとばかり思ってたので……」

悦子「そんな無責任な……。よくもそんなんで、聡実の母親代わりが務まるものね」

冨美代「……」

滋郎「冨美代に当たったって、解決できることじゃないだろ」

悦子「じゃあ、どうして二人とも、もっと聡

実のことを気にかけないのよ。年頃の女の子が一人で、九時過ぎても帰ってこないことを何とも思わないなんて……」

滋郎「今頃俺たちを責めたところでしょうがないだろ。聡実は、俺が再婚してから、距離を置くようになったんだ。離婚さえしなかったら、こんなことにはまずならなかっただろう」

悦子「私に原因があるって言いたいの？」

滋郎「無いとは、言い切れないだろ」

悦子「あんた……」

冨美代「（冷静に）止めてください、そんなことで……。それより、聡実ちゃんがいなくなったなんて、そんな情報誰から……」

悦子「和哉君よ」

滋郎「和哉君？　誰だ、それ」

悦子「和哉君のことも知らなかったの？」

滋郎「聡実とは、家にいるとき、少し会話するぐらいで、そうプライベートのことは聞いてなかったから」

悦子「じゃあ、聡実が和哉君と付き合ってる
ってことも、知らないの？」
滋郎「聡実、その子と付き合ってるのか？」
悦子「そうよ。中学からの同級生で、今もク
ラスが一緒なの。私、二回しか会ったこと
ないけど、好青年な良い男の子よ」
滋郎「そうだったのか……」
冨美代「……」
悦子「本当に、呆れて物も言えないわ。あん
たたちは、一体普段、聡実の何を見てきた
のよ（と怒鳴る）」
黙ってしまう滋郎と冨美代。
悦子「今頃、聡実の身にもしものことがあっ
たら、どうするのよ……。今、どこにいる
か分からないから、お友達が手分けして、
探してくれてるみたいだけど……」
冨美代「そうですか……」
悦子「（滋郎を見ると）私もそうかもしれな
いけど、あなたにも、聡実の親を名乗る資
格なんて、ないのかもしれないわね」

滋郎「……」

悦子「直実の時だって、そうだったじゃない。結局私たちは、娘のことを何にも知らない、ダメな親なのよ」

返す言葉もなく、押し黙っている滋郎。

36　街

春樹と倫子が合流しているが、疲れ切った顔をしている。

春樹「聡実、本当にどこ行っちゃったんだろ……」

倫子「やっぱり、警察に届けたほうが良いんじゃないかな……」

春樹「けど、和哉は自分で見つけたいって言ってたし……」

倫子「そんな簡単なことじゃないでしょ。私たちは、もうお手上げだよ」

春樹「……」

×　×　×

〈フラッシュ〉

中央高校・二年Ａ組教室での亮。

亮「辛いときこそ、心を落ち着かせろ。そしたら、嫌なことなんてどうでも良くなるし、壁をぶち壊すことだって夢じゃないぞ」

×　×　×

春樹「……いや、諦めるのはまだ早いよ」

倫子「春樹……？」

春樹「心を落ち着かせれば、壁をぶち壊すことだって、夢じゃないんだよ」

倫子「……」

春樹「俺たちで、聡実を見つけよう」

倫子「春樹……」

春樹、倫子の手を取り、

春樹「ほら、行くよ」

と、走っていく――つられていく倫子。

37　滝雀学園高校・体育館倉庫

聡実が、迫ってくる三人の人影に向かって怒鳴っている。

聡実「そんなに私のことが憎いんだったら、

殺せば良いでしょ。それで、あんたたちの気が済むんだったら、それで……」

と、人影の内の一人が棒で聡実の腹部を殴る――むせる聡実。

その人影・香澄が、聡実の髪の毛を強く引っ張ると、

香澄「そんな簡単に殺したら、つまらないでしょ。もう少し可愛がってあげるからね」

と、髪を撫でる。

聡実、勢いよく香澄の腕にかぶりつく。

香澄「痛ッ……。こいつ……」

と、聡実を蹴る。

香澄、人影の一人・美央に振り向くと、

香澄「美央、この女、黙らせて」

美央「はーい」

と、ポケットからスタンガンを出すと、聡実の腹部に当てる――気を失う聡実。

香澄「（腕をさすって）痛いことするんだから……。（と美央に）ねえ、コンビニ行こう。ちょっと絆創膏買いたいの」

美央「良いよ」

香澄、聡実の鞄を開けて、聡実の財布を取り出すと、

香澄「（美央に）じゃ、行こうか」

と、もう一人の人影・紗耶香に振り向くと、

香澄「紗耶香。ちゃんと、聡実のこと見張っといてよ」

と、美央と共に出ていく。

難しい顔をしている紗耶香――聡実の顔をじっと見つめている。

と、聡実の鞄の中に、バースデーカードが入っていることに気が付く。

紗耶香、いぶかしそうな顔をして、バースデーカードを取り出す。

バースデーカードを開くと、〝おめでとう。そして、ごめんね。〟と書かれている。

紗耶香「……」

38　同・図書館（紗耶香の回想）

勉強をしている聡実と紗耶香。

紗耶香「ねえ。この計算分かる？（と本を見せる）」

聡実「これはね、コツ覚えれば簡単だよ」

39　ゲームセンター（同）

ピースなどの様々なポーズを取って、プリクラを撮っている聡実と紗耶香。

×　×　×

文字などを書いて、彩りをつけている聡実と紗耶香――二人とも笑いながら、楽しそうにしている。

40　滝雀学園高校・昇降口（同）

紗耶香「とぼけないでよ。内心では、知ってたくせに。それなのに、和哉に告白して、和哉と付き合い始めるなんて、よくもそんなひどいこと……」

聡実「どうしちゃったの、急に……」

紗耶香「私、あんただけは許さないから」
と、行こうとする。
聡実「紗耶香ッ（と呼び止める）」
紗耶香、足を止めて、振り返ると、
紗耶香「あんたなんか大っ嫌い」
聡実「……」
紗耶香「もう、絶交よッ。友達でも何でもないんだから（と去っていく）」

41　同・体育館倉庫（回想戻り）
紗耶香、聡実の顔を優しく撫でながら、泣いている。
紗耶香「ごめんね……聡実……」
と、携帯電話を取り出すと、電話を掛ける。
紗耶香「もしもし、和哉。実はね……」

42　街
和哉が携帯電話で話している。
和哉「えッ……。分かった。そこ動くなよ。

すぐに行くから。待ってろよ」

と、電話を切ると、かけなおす。

和哉「もしもし、春樹か。聡実の居場所が分かった。俺たちの高校の体育館倉庫に監禁されてる。途中の、コンビニの交差点のところで、合流しよう」

43　歩道橋の上

春樹が携帯電話で話している――側に倫子。

春樹「分かった。じゃあ、みんなには俺から伝えとく。じゃあ、またあとで」

と、電話を切る。

倫子「和哉、何だって？」

春樹「聡実が見つかったって」

倫子「どこにいたの？」

春樹「和哉たちの学校の体育館倉庫に、監禁されてたらしい。途中、コンビニのある交差点で合流することになってるから、利枝子たちに連絡とって、すぐに行こう」

倫子「うん」

44　滝雀学園高校・体育館倉庫

カッターナイフを持った香澄が、ゆっくりと聡実に迫っている。

香澄の後ろに控えている紗耶香と美央――険しい顔をしている紗耶香。

聡実「嫌……来ないで……」

香澄「あれ、さっきまでは殺せば良いだなんて強がり言ってたのに、どうしたの？」

聡実「……」

美央「やっぱり、本当は怖いんじゃない？」

香澄「ああ、そういうこと。でも、大丈夫だよ。すぐに楽になれるから……」

聡実「……」

と、紗耶香が聡実を守るように、香澄の前に立ちふさがる。

香澄「紗耶香、どうしたの？　そこどいて」

紗耶香「どかない。絶対にッ」

聡実「紗耶香……？」

美央「まさか、あんた裏切るの」
紗耶香「こんなことしても、何にもならない。
得どころか、自分の人生損するようなもん
なんだよ。今からなら間に合う。聡実を解
放してあげようよ」
香澄「こんな女を生かしたところで、何にな
るの」
紗耶香「人間の中で、死んでも良い人なんて
いないの。みんな、一生懸命に生きてるん
だから。命を粗末になんてしないで……」
香澄「……」
紗耶香「だからもう止めて……」
と、香澄からカッターナイフを奪おう
とする。
香澄「何すんのよ」
と、揉みあいになる紗耶香と香澄。
聡実「二人とも、もう止めて……」
と、何かが刺さった音がする。
紗耶香「！」
香澄「……」

紗耶香の腹部にカッターナイフが刺さっている――血が、紗耶香の制服を真っ赤に染めていく。

美央「！」

聡実「紗耶香……」

紗耶香、必死に聡実に近づくと、縄をほどく。

聡実「紗耶香……ねえ、しっかりしてッ……」

紗耶香「聡実……」

聡実「話しちゃダメ……」

紗耶香「ごめん……ね……」

聡実「紗耶香……」

紗耶香「早く……逃げて……」

聡実「でも……」

紗耶香「聡実だけでも生き延びてッ……。まだ、お姉さんに会わせたくないから」

聡実「……」

紗耶香「早くッ……」

聡実「紗耶香……ごめんねッ……」

と、去っていこうとすると、ドアが開

き、和哉、春樹、倫子、利枝子、真由子、浩輔が到着する。
聡実「みんな……」
和哉「聡実、大丈夫か？」
聡実「私は大丈夫だけど、紗耶香が……。ねえ、紗耶香を助けて……」
と、一同、横になって意識が遠のくなっている紗耶香を見る。
真由子、紗耶香に駆けつけると、
真由子「大丈夫ですか？　大丈夫ですか？（と一同に）早く、救急車呼んでッ」
利枝子「分かった。すぐに呼ぶ（と電話をかける）」
倫子「一応、警察にも電話したほうが良いよね」
春樹「そうだね……」
と、携帯電話を取ると、出ていく倫子。
和哉、呆然としている香澄と美央を見ると、
和哉「お前ら……」

香澄「私たちは、何も悪くない……。あれは、事故だったんだから……」

美央「そうだよ。誰のせいでもないんだから」

和哉、香澄と美央の頬をたたく。

和哉「お前ら、よくそんなことが言えたな……。（と紗耶香に付き添っている聡実を見て）聡実や紗耶香が、どんな思いしたか、お前らには分からないのか」

香澄「……」

美央「……」

和哉「お前らには、しっかりと罪を償ってもらうからな」

黙ってしまう香澄と美央。

険しい顔をしている春樹、倫子、利枝子、真由子、浩輔。

聡実も、紗耶香の様子を伺いながら、香澄と美央を見て、難しい顔をしている。

45　病院・病室

紗耶香が、ベッドで眠っている――紗耶香の手を握り、付き添っている聡実。
ゆっくりと目を開ける紗耶香。

聡実「気が付いた？」

紗耶香「聡実……」

聡実「今、ご両親、こっちに向かってるって」

紗耶香「そう……」

聡実「どうして、いきなり守ってくれたの？」

紗耶香「え……？」

聡実「一度は私を裏切ったのに、どうして守ってくれたの……？」

紗耶香「（苦笑して）一匹狼だって、思ってるでしょ」

聡実「そんなこと……」

紗耶香「私、見ちゃったの。聡実の鞄の中のバースデーカード」

聡実「ああ、あれね……」

紗耶香「私ね、親友を裏切って、いじめに加担した自分が、ひどい女に見えてきて、バースデーカードまで用意してくれた聡実

に対して、こんなひどいことをして良いのかなって思うようになったの……。それに、香澄たちとも、やっぱり合わないって思ったの。だって、聡実への報復のために、和哉を襲うように仕向けたり、この事件を起こす日が、よりにもよって私の誕生日なんだよ。とても、あの二人にはついてけないって思った……」

聡実「まさか、そんな理由で？」

紗耶香「そんな理由って、結構大きな問題だよ。一時は、私だって好きになってた和哉なんだもん。その和哉も巻き込むなんて、許せなかった」

聡実「紗耶香……」

紗耶香、聡実の手を強く握りしめ返すと、

紗耶香「聡実、本当にごめんね。私、和哉のことは諦めた……。だから幸せになってね。私は、自分の罪を償うから……」

聡実「紗耶香……」

紗耶香「どんな罰でも、受ける覚悟はできてるから……」

聡実、返す言葉もなく、紗耶香を見つめる。

46　ビジネスホテル・悦子の部屋（数日後）

和哉が来ており、悦子と話している。

悦子「和哉君。聡実を助けてくれて、本当にありがとうございました」

和哉「いえ……。何はともあれですよ」

悦子「新聞見たけど、聡実を誘拐した同級生の子、二人は逮捕されたけど、もう一人、聡実を庇って刺された子は、書類送検で済んだそうね」

和哉「ええ。その子、聡実の親友だったんですけど、いろいろいざこざがあったみたいなんです。でも、今回の事件があって、和解できたそうです」

悦子「良かったわ。これで、無事に日本を発てるわ」

和哉「また、海外に行かれるんですか？」
悦子「仕事が、まだ山ほどあるからね。（と笑うと）あ、そうだ。聡実から聞いたけど、和哉君、一度聡実と別れたんだってね」
和哉「はい……」
悦子「しかも、家族の仕事の関係で、アメリカに行くとか」
和哉「そうなんです……。また、聡実とよりを戻したいって思ったんですけどね……」
悦子「それも、聡実から聞いたわ……」
和哉「そうでしたか……」
悦子「でも、聡実言ってたわよ。例え、アメリカに行くことになっても、また付き合いたいって」
和哉「聡実が……そう言ったんですか？」
悦子「言ってたわよ。それはもう、嬉しそうな顔をして。この間の事件で、和哉君が自分のことをどれほど強く思ってくれてるかってことが改めて分かったみたいよ。だから、またやり直す気にもなったんだと思

う」

和哉「お互い、やっぱり好きなのかもしれませんね（と笑う）」

悦子「自分勝手な娘だけど、また、聡実のこと、よろしくお願いします（と頭を下げる）」

和哉「はい。こちらこそ、よろしくお願いします」

と、悦子の携帯電話が鳴る。

悦子「ちょっとごめんなさいね。（と電話に出ると）もしもし、どうしたの？　次？　一応、来月出張で、四日ほど日本には戻ってくるけど、どうして？　え……？　冨美代さんが、そんなこと言ってるの？　分かった。じゃあ、来月ね（と電話を切る）」

和哉「何かあったんですか……？」

悦子「何だか知らないけど、冨美代さん、妻の資格がないから、永井家から出ていくつもりでいるみたいよ」

和哉「どういうことですか？」

悦子「私が知りたいわよ。だから、来月日本

に出張で来るときに、よく話し合うつもりよ。（と苦笑して）ごめんね、うちのことで、いつも和哉君に心配かけちゃって……」

和哉「いえ、僕のことは……」

悦子「私、夕方の便で発つから、聡実には会えないの。だから直接会って、もう一度やり直そうって、言いなさいよ。応援してるから」

和哉「はい（と微笑む）」

47　アパート・谷島家・居間（数日後・朝）

春樹、倫子、夏希が朝食の支度をしている。

夏希「良かったね、無事に事件が解決して」

春樹「まあね。けど、より戻しても、結局は和哉、アメリカに行っちゃうんだよね……」

倫子「そうだよね。すっかり忘れてたけど、和哉のアメリカ行きって、大分前から決まってたでしょ」

春樹「何でも、アメリカの住む所とか、まだ

会社の引き継ぎとか、終わってないことが結構あるんだって。ただ、和哉の話では、春休みぐらいに、向こうに行くだろうって。あ、そうだ。みんなで、和哉の送別会やろうよ。うちのバイト先の喫茶店で」

倫子「ああ、それ良いね。こういうときじゃないと、のんびりみんな集まれないし。でも、ちょっと気が早くない」

春樹「ちょっとぐらい早くても大丈夫でしょ。今度、和哉と相談してみる」

夏希「アメリカか……。ねえ、この際、私たちも、近いうちに海外旅行でもしない？」

春樹「そんな余裕はないでしょ。ただでさえ国内旅行だって、それなりにお金かかるんだから」

夏希「今はね、結構安く行けるんだよ。二泊とか三泊だったら、そんなにかからないんじゃないかな」

春樹「けど、パスポートもないんだよ。手続きだって面倒でしょ。俺、どうもああいう

書類系苦手なんだ」
倫子「へえ。新聞部なのに意外」
春樹「今、新聞部関係ないでしょう」
夏希「手続きなんて簡単だよ。戸籍謄本とか、必要な書類があれば、すぐに作れるよ」
春樹「へえ……。俺、出生地とか親が誰かなんて、どうだって良いから、戸籍謄本なんて見たことない。けど、それって役所に行って、取りに行かなきゃいけないんでしょ」
夏希「それは私がやるわよ。戸籍謄本をもらうときは、本人の署名捺印がある委任状さえあれば、代理人を立てられるから」
春樹「そうなんだ。案外、姉ちゃん詳しいんだね、そういうの」
夏希「あ、バカにしてるでしょ」
春樹「別に」
夏希「まあ、旅行に行けるかどうかは分からないけど、パスポートだけでも作っちゃおうよ。善は急げって言うでしょ」
春樹「まあね」

倫子「良いじゃない。せっかく、私たち三人こうして家族になったんだもん。たまには、こういう贅沢するのも良いと思うよ」

春樹「贅沢ねぇ……」

と、苦笑している春樹である。

48　牧家・和哉の部屋

和哉が携帯電話で話している。

和哉「来週の日曜日？　ああ、大丈夫だよ。え、俺の送別会？　そんなことしてくれるの？　ありがとう。うん、全員揃うんだな。よし、分かった。ちゃんと開けとく。じゃあ、また」

と、電話を切る。

49　喫茶店〝エテ・プランタン〟・全景

50　同・店内

利枝子、浩輔、和哉、聡実が既に来ている――寺沢が、水を差しだす。

寺沢「今日は貸切ですからね、どうぞごゆっくりしていってください」
一同「ありがとうございます」
と、厨房へ戻っていく寺沢。
利枝子「（真由子に）今日、真実ちゃんは？」
真由子「お父さんが、病院の託児所に預けてくれた」
利枝子「そっか。（と時計を見ると）ねえ、それにしても、春樹も倫子も遅くない」
浩輔「何やってるんだろうな」
と、春樹と倫子と夏希が、険しい顔をして入ってくる。
利枝子「春樹……？」
寺沢、厨房から顔を出すと、
寺沢「待ってたよ、春樹君。今日は、お姉さんも一緒なんだね」
春樹、寺沢を睨めつけると、
春樹「店長……」
寺沢「……？」
春樹、寺沢に戸籍謄本をたたきつける

と、

春樹「これ、どういうことですかッ……？」

何事かと、お互いに顔を見合う利枝子、真由子、浩輔、和哉、聡実。

春樹「どうして僕の戸籍謄本の父親の欄に、店長の名前が載ってるんですかッ……？」

驚愕の表情を見せる利枝子、真由子、浩輔、和哉、聡実。

険しい顔で、寺沢を見る夏希と倫子。

寺沢、目をそらして、難しい顔になる。

いつまでも、寺沢を睨み続けている春樹である。

つづく